

X

S 156

F
シ-118

490.9

Sh-56
3

No. 3951

1/2 S



富士川文庫

2025

小兒必用處方集卷三

牛山翁

香月啓益

繆鑑

一 小兒備病之統下

○小兒の病大小と形々々々ハ吐乳より起ると保嬰備病及くたり小兒氣とあまた事あらじ病乃きざひと公私へよく嘔吐症之療治をべきたり 二陳湯よ加減にて用べきより 連翹沙仁と加く用ひるがよに之ぞく吐乳の症よ宅を襲虛寒ととりだ連翹と用ヒヒ全癒ゆ 亂もべき事ナリ 三 一
○蘇對微乃様よ小兒の發は瘡とて病ハ早皆向く

く我鷦乃口けめあくこき胃中は熱毒やうと云
てモ和傷石にとりひ又ハ右もとギトウモテリ昆布と
馬橘や細クシテ多リ承よつけて左の上吊
をそげば左の馬橘ヨツキシ向きわざそれく愈る
アムト右もとギトウ味あきバ小砂帰くほもと
口瘻と治らるよ黄連と猪朮と蜜丸ととき付
れハ驗あ】我事は瘻みて小火飴と硫黄あハが
ニ加減清胃散と用べ】黃芩 黄連 升麻
石膏 連翹 辰砂 黃柏 生耳葉 各本 右砂末
トてさゆえもす】羹葉す】もす

○生子の症よよ脛腫く舌乃下不肉出来るものあり
室古と名付と云ふ和傷ニ小舌と云ふく獨活
療治モニ事も額ノ下乃ま中ノ癰氣の穴と云
ふわるまゝ而子癰ある事又壯やぐられハ小舌モマリ
く愈るを當歸尾乃ま當歸尾乃ま當歸連
翹湯と用べ】當歸尾 連翹 白芷 各本
大黃 桔草 各本 右子のやせれお小にすりて服と
かげんく冰ぐりかて当歸一用べ】テ驗あ】
○嬰童而向子木右乃病ハ心脾の癰れらをもあひて
きを患右臍く激くよ腹大すては体ニ漏塞ナリ室
右木右苦子の薑茶ハ毒澤速翹湯と用べ】蒲黃の

未と者也よりく傷みてときく吉よやく又薦
柏の粉と蜜よと見くわるもトシナリ
○走馬癪と云ふ疾生てく血と聲一ノ年奥く薦
齶相を歯茎く歯恙く脱落額よ穴と等く見方
み効かりと玉潤らへ況よくらも候齒くとど
えの元もなうりよドリくふくやかくよ山病に
久氣せ事それハゆゑ口中奥きよりあご早く腫
まよ子ろ葉竹はれ多く療治せば一走馬牙癪と
あらよ清胃散麻湯より
半夏 白芍菜 茄根 黃連 生草茶 防風
白芷 白朮 軟石膏 右乃葉酒
ゆゑ一毛驗らみやうす
○錢仲陽の院よ醫門の病ハ少不免る元々弱く神竊
いまく定すがんがんやしき形のゆどり或ハ腐
き聲の有る器うどけ呼聲とゆく心神と等
疎ぎぬびらく眼とんつむ足と筋一搐搦(搐搦と
といふ) 痘沫と吐く氣より病の勢叶ひ急
するもと名跡能と云ふ病のゆるむると慢驚
やうするもと云ふ病ハ少からぬ事す

され候處多々もしくは瘧疾よりは病ひき
り、わざと多く瘧疾をよしめ醫術よきれどく療
治せば一而斷々治せば辭よりくわる七
日よしゆとかうして年長どくねい癲癇の而く
多廢人よする者わればやんの病れうちまくけ病と
第一の重病とあらざり

○聖風始てのう眼とつぼまくよ竈矢事とて服
とよのあみづりあげたるする付く牛黃心圓萬病
解毒丹紫金盤玉福丹をど云某又て奇效丸奇効
丸命一株丸至寶丹などと云某の類れ龍腦麝香ち
どのゑへ柰ときばく冰えぬをもとゆせ

えち病うづのけとさうしたる湯みて御使用のへ
やれあくしくえをす裂り程退くほ薬素と菊
ごときとよりよの名方ハ醫も行の象す傳く小室
感ハ蒸肆スと付い薑薑而す御令へくわれば
と立ち畜へとき用意よしとしちがきをあすとてにあき
びぬ壁りてぬよ二陳湯二方薑よもぎ子子鈎藤鈎黄
連と加へて用べし

○急瘧疾と治するよ金瘧化瘧丸とよ瘧方あり

天麻天麻

砂砂

南星南星

半夏半夏

雄黃雄黃

枳實枳實

石砂石砂

硼砂硼砂

白附子白附子

全蝎全蝎

珍珠珍珠

子鈎藤鈎黄子鈎藤鈎黄

麝香麝香

三合三合

槐角槐角

速翻速翻

釣藤鈎釣藤鈎

參參

山楂子山楂子

參參

全蝎全蝎

子鈎藤鈎黄子鈎藤鈎黄

參參

右細末一ぐく大さる重きに熟
うると三十ニ枚とさりく核とちく中み巴豆
と一粒つれく三十ニ枚を少くればく
麴とあよそく重きとつと減ふるまかどつと
水すひる／＼めの灰よけく燐／＼ねの塵
の中乃巴豆とさりく唐と肉と竹茹をとしげら
く右の細末乃茶と稱りやくこと内へ米糊かと加て
丸を丸薬の堂二分り／＼金箔と衣よかけく
一丸は一丸と無事よハニ丸と年乃ねよ丸と
用又生姜湯を用くよ／＼甚きに付は薄荷の薬局
毛用毛よ／＼は方ハ諸の醫者よのせらうされば

方ハ除表甫の方と乍り／＼か減／＼すが家右
耳もり傳へあら名方よりくろ松の事も無を
驗もれがうれハせりなちのなちよりとくよ
うすゆくぬ

○急鬱門ハ高々ハ高々と下／＼利といひすゑし
備も舟をとくとトト一葉を用り半もあるを燒ん
よて老も幼も靈めぬと下す／＼し 南星 半夏
各四巴豆 半夏 姜蚕 各八 大黃 二文 軟粉 五
半夏六枚 一
右細末一ぐく水糊と毛を合ひためて毛と角じ
感ハ蜜ゆて待りく用のち有山靈め丸乃方法もよ

うち万病回春のへはを葉を全銀湯を用ひとあり
まが乃ちよもはおろ茶と全銀湯を用ひとあり
さあやまつたり毛根薄荷湯の事す河澄の役
み金銀薄荷と即金銀薄荷也今家園
薄荷の葉圓々小との其形重根根毛根
義よりとゆきひもの薄荷の英湯を用ひす
アリナリをあめ人の重根とさんどなけよて用ひわ
利は既除云爾のと取る疏よつまびうらむ心
始へと申らす

○急喉門飲くは御裡の六君子湯 人参 白朮
向茯苓 陳皮 半夏 姜半身と六君

子湯とよすひ人參よハ朝鮮人參すへニ重加べし
鈎絆鬚人參すじでニ重りどりふべ一ナニ事とつそ
薑一因べ一近來ホ致ア醫者りうのひうちやんま
事とへう坐とせびきわと附ら醫術のあらうけ
み事とつそとよるとせび病家のも事とつそと
却へばかのくうのせびをよ敷きものへ事とつそ
ゑ事へあせよはほうどりひくとモカぬ酸もあ
られ系み事とつその理とあぬ左身よ生姜ハ味辛く
トモ発散一備乃茶毒と解一水毒と解らるる
くハ生姜ノりの茶とくもすれ多と事とハ味辛して
脾胃と補ひ而茶と潤和らる功能あらざとい生姜

と輕らと服系のうちよろしくあらすりて右書
とへあらうらといまふくよしりうらどぞじしくや
あらすりはまくらへよしりうらどぞじしくや
ときざみく葉落入高く御令の付うらばかくあ
くのうけりと付の高家よ輕とへゆるどじわや
取れやよせよ者も一 すづ門よあそぶ者うらふすげん
あらすじようぬ事うれはち氣玉傷よ本筋妙に
御落沟山直ふとかく驚角乃御理乃業よ因くさ
○慢驚角乃症ハ或ハ名聲同内症危よ遠くさう
よ涼葉と角ひき 一 或ハ下毛事多きくちく微
或ハ吐逆吐乳すば池深刺病えくづりまくに驚

瘧一感ハ風邪腸胃よりのく大便如便也便也
りうれらび慢驚角乃敷毛うり共在日取溢汗
やく脆る事とぬく咽渴四肢写とよ游網大便如便也
一或ハ奥く走る牙麻もうり目と掠くハ癩病了
敷ドく絶よ死りよ方うち至中肝胃虛寒し
べ泄利うらものハ治一 がゆーとあく一 理中陽
也一 向木 木 人参 木 甘草 木 乾姜 木
右細こす あふめれどあすを敷ド 服五升一 汗也
ハ黃芪とあくよ大便不禁 不禁よおきひと車ド
すも山茱萸肉瓣豆陳ほ向花苓とがづべ一 虚
症一 く泄利とうきと附子とあく用べし附子理中

湯と名付くも益ち肉桂蜜棗米と加へて用ひもよ
トく慢疹ハもくら化病より實ノトキウモのうれ補
薑より入る湯 入參 白朮 向茯苓 茯
草が汗多事と加へて用ひてし薄皮と加へ
と黒参散と名付くを姜子湯よ加減トく用ひてし
名院氏の七味向本散と有べし。葛根 参 莪
人參 木通 向木 木通 茯苓 茯草
石刻トクニ色りぬすよ薑トクニ用ひて、薑蒿と
去く陳はめにと加へて用ひとれひを驗わリ
○慢疹のとじむるよ術藥とつらがあると 人參 莩
向也薑 木通 茯草 木通 容刻トクニ用ひれすよ

薑トク用を驗神のびとと萬病回云ふそち
け方あるを驗わろ方をと
○王國君の經よ立薑よ生よ立薑よ根
やを色まく黄りと形甚體く微々服ふら
初生より二十日ゆくと薑とりヒ二十日云ふと病
療とうとまう 當蓋 拙拙よ癥疾ハ症ふ病の分
わりとつともあくハ脾胃の病よ屬するに乳母の身
あわしく耳肥のれ 離離せりわくをも食へ或ハ渴
醉食ふ能く小兒よ子供と木くゆつようく飲ふ
脾胃よ鬱一熱とすて吐氣とすて又や更に
さわとぬじよの上あづくや心の啼とをりんと

御くすり取とあくしよすく足支脛胃う嚙
脚一濕熱とすゞくその湿熱よりく脇中す
あやじに生と生ずるすらわれと脇中といすり又
小兒吐乳すく脇中或ハ泄泻すく脇中或も
汗えくやまび或ハ癪えくからび或ハ嘔嗽すく
頭瘻すく愈ばせぬやくにああぐくに
之経の津液かりき脾胃虚損すく脇中とすもとす
かよけあがくきづひ附々薺自ら衣と水と漬くよ
眼あく色黒づくらく毛髪と筋肉形瘦こそ
の腰ひく腰痺て跡のびく胸窓おの者ハ左症
をもひ病や定氣よみだりがもううれ者ハ右主症

久くも虫と化一ト一ノ利とゆる半わき 本半の
碧家より依家ともあぬ内らぬ家より 家より癌か
わへ國すれ承しろの理 之其系よりの貴の事とあり
けり 蟒蛇蟹蟹赤蝦蟆柳虫桑虫桓山虫山蠶桑蠶蜻
蛉と飛く黒蝶すと用く利とゆる事ある一又病の
害をよみ漫饅頭とよきく禍害を加葉一くほけて食
はれハ麻虫と殺一薙て殺るとひよりすつ方葉桑
の矣す

石麻呂イ一此ものをもとを奪やせよ
ナリトシテアラモルヒタシテアラ キセキセ
ヤシタシタシタシタシタシタシタシタシタシタシ



驗と毛ちるやは夏病も癥とまつてのもの病也

ひちり

○あ瘍ろ症よ用る丸業ふらぐあすをみあらん
四味肥兒丸 黃連 薫夷仁 神曲 夏芽 分名木

右細末一錢水糊として用べ一每服二十丸
そのゆゑらん小豆ドリと用ひ一鹿皮川棟子と加へて
ち余肥兒丸と名づけ共よ癥虫ろ症と治すらる
矣也

○加味肥兒丸 胡黃連 木香 桂榔 黃連
三棱 藥木 青皮 陳皮 神曲 香附子
麥芽 蘆薈 史君子 右細末一錢をばら法事の

びく毛収せらるるをスリリとあふべきより諸の
癥疾身煎液肚脹腹大に一宿瀉泄治らる
用く驗也

○本邦の醫家よ傳する所内保至圓とりよめ方あり
方中元よりある所の法の醫云と考る所のうちすむ
すゑく保至圓の医家ありけ方との名別すりて
本邦よりばれ右名號もれくある方ナシノと葉紫
の方の人の便より南敷人より傳するといふ事すら
を多め方には乾海参(おぼりの)狼毒(わばりの)など
のち方すしてかのの癥をす用く奇妙な驗ある各
つもとをくよ極まるゆめ方すらびだりとくこよき

○かゆりとくみわざばはくがにすをす
○小兒の癬積の症と腰のうきよ塊ありとく様
夕を襲とせらる病ありと癪うどほよまぎりとり
感されと虫癪又かたうひちど和倍すふけるナリ淨
腑湯と用くよ

柴胡

白茯苓

猪苓

三棱

莪朶

山楂子

澤泻

各一

黃芩

白朮

半夏

人參

胡黃連

取草

各三

右利

生姜大棗

大棗

人參

薑母茶

○瘡瘍の癢とて漱聲とす

五心

志とハ胸と腹のまじ
裂ぬの足のまじだよ

立毛と頸熱とて空汎

汗熱と飛熱悴毛のあくらくハ次ヤヒナヒ症あ
多く瘡よよされ醫師みれ多く療治をべそか
○瘡の出よよりく瘡の志とちう者わう保養を
角くと威ハ緩緩魚の腸とややせそりとく含み
網あされちとめとひ赤色の太刀肝とくとく含み
○瘡の出よよりく或ハ立と含ひ咸い土氣と含ひ張
ハ崩れと含み數の志あ立止れをもと股中の出と
ざり保養と角くと瘡とて又傷胃寒腹湯
と角くよ

黃芩

陳皮

向本

向茯苓

甘草

輕石膏

右脚とて水とて敷ド用へしを施

卷之三

○保嬰湯より少々遅と遅れずありてく胆の弱
を緩し赤く相克者ありされど解熱の病とみだ
く脾胃の氣弱きをやうとえり又鼻の下垂
瘧氣者ありてても脾胃より肺氣もあつて
ゆる有りとあらず一煎漬煎後葛粉と細末一匙
の水又砂糖とあく玉そく豆粉と付しておろ粉蒸
とすまく付くもよ

○弦仲陽の死と脳毒の癌の變遷にて癌と呼ぶ
事よりとまりて熱いもの死んでゐる癌の事
を多く見る事あるが癌の死んでゐる事の多
い事である事である。

トモリナリム一而よりくくわると和後よ
リとくとももよりくくりての膳出ぬるな
を餘りうきうきと癒ゆるを和後うらと
すひとくとも海蓬根^{シマノハ}根^ル切るによ候るどんづる
モ本邦^{カミコブ}也醫門^{イケドウ}をとおとよそ下^スとつめ方^{カタ}
わるせり又^{アリ}之^ク用^スきうちもくに下^スくわぬ
る事あらまち^{アラマチ}を^{アラマチ}也^{アラマチ}猶^シ有^リか死^{ハシメ}にあらずかされ
シ脂毒^{シバツヌク}と^{シバツヌク}有^リ浮游^{ヒヨウ}と氣^キづき^スから^ス乾^シ毛^ス傷^ス
ニモ^{ニモ}やれ^ハ熱^ハト^トく^トく^ト御^ス脂毒^{シバツヌク}有^リ氣^キぬ^ス一病^イ有^リ
きざひ事^ハ事^ハ下^スと氣^キと氣^キト^トく^トう^ト
○王微^ミ也^ハ經^ス有^リ丹毒^{シヤク}有^リ毒^ハ頭面^{カニヤウ}脣^{シラヌ}感^ス足^ア

あらこことをもあく解くのとらごうびを蟻標がまと
を痛甚しとて蟻標毒をうと云ふと解あれとあらく
すとひそくとくやとゆ葱とらう薑とくはせれ
ゆつからぬ小豆粉と蜜子清よりとくよ
と見て付てよ。津脇湯と用く。け病ろきば
りづよく醫によのの醫附よ難く癌瘍とて山瘡
一觸よせらへく脛肥瘡農はちへく傷うぐみくる
る者を剥りてすり摩角酒毒飯と薑と荆芥穗
防風、葛苓、牛蒡子、摩角、其物
右利と水煎一服してよきかと代用て
○中藥に蟻毒をうちうるとて病癥乃致の瘡と生ずる事

あらわ信ひせんやととく樟麻葛根湯子加減く
圓升麻葛根白芍葉白芍桂枝桂枝
石剣大黃大黃陳醋陳醋黃芩黃芩
子荀桔梗桔梗連翹連翹山梔山梔
内致病癥の致外うちつけ薑又へきり葉をくつふ
ものといふをすまされぬの瘡毒によく脛脇と
せりく息だりくやて呼吸せりて足立ち立ち或は遍
疹癰とくと軍械病とするす
○嬰幼瘡は急胸急背の癌癌根とよる癌骨と
癌の背筋ぶく脇うちよめ、すり頸をりく姪く癌
のどくあるとよる癌胸も又胸筋けりよもくらう

氣の形は仰りけ病めい寒寒あくにあらま又初生
の仰り背と冷て或ひいまと尻筋のせきぬあきよ
あくそりとすりとすりとせひ病とまほらうと
たううけ病れまじりあうじづく豊よ上のものも作
とれぐ瘧疾らべ一治身半身まれに偏癱の者
まことうくせきほの序輪者とせりうる若蓋節
みせ病と軽症せしりとくとけくつらべ一瘧
疾一く用そを効る一 本邦のゆく所多く
は病の骨氣の反対とくとくたゆみの他薦丸と角丸
をもあともども二術うちをかくへ熱にゆく脾胃

をあくとが一比多うどのれの勢に病とめりあう
を蓋べ一能くつねまくうとま
○鐵仲陽乃院より小穴の鶴膝の病へ足膝弱く瘦く細
く筋乃膝よりはるどひ筋体のうち是生れづまく骨筋
より化心火或いは温よりちくは病よ衰びがちつと
立ちとゆゆ人考よけ病いち病れ復くは病病の後
傷寒を熱病のな肺より行ちかうけ風中もあくと
夜のきくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく
療法とおむきよる。とゆくとゆくとゆくとゆくと
猶者よろりあるとス防内湯と角くよ
人参 黄芪 富帰 川芎 藤白 肉芍藥

防汎
右前

羌瘣

牛膝

附子

君子取草

左前

姜桂

附子

君子取草

内は四方と東よりハセノリノモトアラヒガ方
カモモタケシテ、強が窓う右扉を左扉たゞとテ、左葉
キドリ角ひされすも、扇子をもと簾人とすれ去る。

ウギキリとて治とやり難いとあくれば、ことを事々と
登坂、ちよよをあがよ仕一以を後國日向とすあよみ

鳴何某とて、家來ありて、七十罪の附よ、刺痛と黙
愈くは勝瀬弱くうけやもきずんをきと一年りど

もち、絆通をあひぬまく行歩ぬぐく、とく酒くう
り、細くりて鶴膝よづるを致ぞば、薬膏肥あま

衛醫は治療と教え難がと乞うるもと、左房
をさがとひされ、とてし、念を事にすよどうく左房
より能波は、むりくせよ、寫りる名醫、うちよ治と
おこす年ねども、治きゆゑをされあす。色萬方を
清り、もじきく、かへる所、风湯を、原八條の地、薦先法か
實乃右帰丸左帰丸の外、又よもがとあくする醫
ノ多は、ゆくを、まわ方と、傳令、く國とつども
御くよ、足弱くめ、うちかづく、あきのよく、以後、石井禁、若
志とすらうのば、予が邦君東武よ、仕仕、
比すてて、本あるつと、東武よ、后、後、くちもよゆう、
ワだすもまぬ東武よ、生うきうえ、裸姿、用の本キ、あ

ちとあはゆると雪もくけやまと中津よつきありとて亭
よ坂りとひきのよけゆとやけに家よそりされば
の家ぞうれ子がどよてて頸姫く背骨けゆく
あ良き老よ鶴の野ひやくやせく肩ひ十七八の椎の筋
を走らるやどた々々く海よま縁すれわとまくも
れかうくとありもうちあらと伸毛革ゆる尾を
の足と下より右ひきとよよりくあらぐくの
こ度一毛りあらまよの筋ととりくだ石の行け
てうの筋はねやすれわとそくみく筋よあくへだ
左足と左手とあらをかへるよ左なる足くらひ先
をとくらむれやじわ組いらへ室をゆきす中よどみ

すすめく筋又筋がくと下をとよすな
一くわらびくわらきくろやくよくかくひく
廢人きんしとれひくよびくく後とケス
打勝と勝一筋とくくは病治と一十九
と珍ざんハ治とくびま一あひと珍ざんハ治と
事あかく精をほつづく多う勢う勢う勢う勢
愈へてある蒸と角ばづく枝くもくとくじく
方とあふ 人參 白木 富帰 川芎 藥根
黃芪 發地黃 山茱萸 山茱萸 白芍
麻膠 桂枝 薑附子 肉桂 蒼朮子 海鹿
桐皮 木朮 蕤苡仁 牛膝

防風各十
川烏頭約藤鈎各八

乙

卷之三

卷之三

右細末一袋朱糊

卷之二

九
一

猪狗

二
五

卷之三

九

右綱まくく朱糊もと丸一倍相手よりの
にくそよ五十石であるもて万一取引めを取る
半半色にてゆ後不繋やとくのをもよせき
きりやと足れども伸くわよとうつとへよせき
らむかあひとくは一色のはあかまうのきりがる
うよ雲長一頬涙肩身をすまうやうの半身とぞ
くく考ふれどくちりぬ二年のは長門の小儀と
ゆ温泉よしる事三毛にいくよく假りく
金人とりうちもろなりつけ茶やれどもろ病と云
うか半身に虎脛骨穿山甲ろかり下虎の臺

ようてあくび下る者やうやよまの事あられ
○傷寒病すかゆう門 門もかのの事の
わく今おもむ信草うるみ 乃ねいあせ

右方へひきとれく一筋ほり下の海のこうへあ
と解癰と名付え骨を不らのゆゑに 虚弱
りうまれ何とつむへ一門もどり半身もろを
病氣をもとめへとくらうちよた体毛と角く

○小兒の遺尿ハ腎の氣膀胱の氣若ニ虚弱多羸
やと除之爾の後ふとくら骨の氣虛怠一膀胱
風冷のみまぢり實に遺尿をされと尿床とよ
と玉瀉えに夜よつてうらやへこの事のひ何アリ



りくて遠取すりあり。毎日と行くものなり。と見え
合ひしるつて、小汲とリヤアレジして、定めのと
きよもひの付くとて、ほものうちのものとせまると
で、ひそかに一と手の付く事なく、あくと七事と
も、麻とりへもありて、あはすりて送取る
ものあり。雞腸散と菊、ちうとうとさうと
雞腸、おらうと雞の腸を、壯鷹
桑螵蛸、わらうとよ、龍骨、左脚、右脚、令
少陰、用うすとスナの雞スナの推腰眼、もじゆのよ
乃定と、其驗也。左角丸八使ひ。右角と肩
く窓もあつた。

○主患の後、よ印生のや文、瘧、偏腫、くたり者
あり。痛り、まくら、治すべし。あつて、愈すものあり
とて、うちとねらまくらまで、やうり、瘡、まくら、び
○主患の後、よ印生のや文、歩筋、まくら、瘡、まくら
半とて、ひがみ、よ氣血、ひがみ、くもくと、まくらなど
あらす、まくら、よ牛膝、あく、蓋板に五加皮、とかく
用くよ。

○主患の後、よ印生のや文、瘧、偏腫、くたり者
あり。萬能丸によく。石菖蒲、人参
川芎、葛根、乳香、砂琳
右細末、よく、參、砂琳の入よ。ドクナをつるる。

○玉歎の後の後子歯つるを半身ハ嚙れ石をうち
もうち丹溪のち薦教すとく
當故タケキ 向苦カクニヤ 草草スルガ 先ニ陰カニ 右ゆカニ く歎
牙ガ よううわくべしもく食のう湯までかげづ眼
しおがトモきらう

○少兒停耳の症とて耳より膿と耳イく痛ツヨシ
きやのりとお伝耳イだれとよけ症シヨウに多くハ肝腎カハ
と氣管カヒカンのよううくから薦ケラフ者カニ氣教カヒカンと角カクと
仰カマツカり付カマツカとあく要カニるものとくわせカハと癰カハと免
みのを立カタチ儀カジみと立カタチ施カシすと相カシ麻カシマのゆカシマととえ
耳イの肉イへうちカハとれど

○玉歎の後子歎よ少兒よハ薦ケラフ十裏カハといふ事カニあ
く三年カニ二年カニよ一敷カハとく薦ケラフす出カハく乳カハとあゆカハと
號カヒカンくかくカヒカンきかカヒカンとせんカヒカンびくカヒカン一敷カハ一裏カハよあカハと
に少兒カニと乳カハと號カヒカン一敷カハとあゆカハと乳カハと號カヒカン一敷カハ
前カニの由カニと二年カニする大半カハとあゆカハと五石カハナニうす
敷カハ薦ケラフの半カハとりうくわとひすく霧カハ立ちやうと云
てと和カハ傳カハうれと音カハあカハ聲カハとりうくあるがちよニテニア
よハ聲カハうじかの半カハハ葉カハと用カハすよりだ生きうき霧カハ
いをあゆカハい敷カハのきかカハ一カニ外カハすとくに又
ゆゆすとくカハくそのわカハの必カハ聲カハ一カニかカハくがカハまち
むちカハを一カニかられて聲カハもきのをはる

てうつゆびに目を掩ふ色はすと覺えぬよく一そ
頬にき附く病とのゆく癰瘍ヨモウラウとよき生まひ

○小兒の痰ミツ病ミツイ大人の痰ミツ病ミツイ」上より下氣病を
もゆくやくよがさうなるごろとあげてありいかう人
とゆく「氣の病ミツイ」と申すれども氣去ミツマハいあ門ミツマハと云ふ氣を
癰瘍ヨモウラウとぞとちうら歎ミツマハその内ミツナカの用ミツヨウを利ある葉
をたすもくとくもくよくもくわらり

○小兒への氣とひきだるよし惺惺散ヨシヨシサンよすう

白朮

白朮

桔梗

桔梗根

細辛

薄荷

各木

各木

各木

各木

各木

各木

各木

葛根

桔梗

細辛

薄荷

各木

人参

○や穴勢ヨクセありく風フウ及キ含摩カム度ドニ分ブぐに付タ加減カヘン
四疊瓶ヨウテイボウすうちろスウチロ一イチ 薄荷ヨモウ 向木ヨウモク 厚朴ヨウボク 陳皮ヨウヒ
茯苓ヨウリ 大腹皮ヨウベイ 桔梗ヨウキョウ 向芷ヨウシ 本草ヨウラン 黃芩ヨウセン 白朮ヨウジ
右ヨウ一イチ て生姜ヨウショウとゆく水薑ヨウザイ 腹ヨウ主ヨウ 吐ヨウ瀉ヨウザク
者ヨウ者ヨウ嘔吐ヨウトあるものヨウの向芷ヨウシをちて附タけにとめヨウよヨウ
○小兒肺胃ヨウホウの氣ヨウキよく泄ヨウセキとゆく氣ヨウキよく吐ヨウト氣ヨウキも
もくヨウ吐ヨウ氣ヨウキもくヨウ 細毛ヨウモウ薑ヨウ之ヨウシ額ヨウケよもヨウモ也ヨウ

○や穴勢ヨクセありく風フウ及キ含摩カム度ドニ分ブぐに付タ加減カヘン
四疊瓶ヨウテイボウすうちろスウチロ一イチ 薄荷ヨモウ 向木ヨウモク 厚朴ヨウボク 陳皮ヨウヒ
茯苓ヨウリ 大腹皮ヨウベイ 桔梗ヨウキョウ 向芷ヨウシ 本草ヨウラン 黃芩ヨウセン 白朮ヨウジ
右ヨウ一イチ て生姜ヨウショウとゆく水薑ヨウザイ 腹ヨウ主ヨウ 吐ヨウ瀉ヨウザク
者ヨウ者ヨウ嘔吐ヨウトあるものヨウの向芷ヨウシをちて附タけにとめヨウよヨウ
○小兒肺胃ヨウホウの氣ヨウキよく泄ヨウセキとゆく氣ヨウキよく吐ヨウト氣ヨウキも
もくヨウ吐ヨウ氣ヨウキもくヨウ 細毛ヨウモウ薑ヨウ之ヨウシ額ヨウケよもヨウモ也ヨウ

○ハ銀氏の七味白朮散と同くよ。藿香もと五味
陳皮砂仁白扁豆と加へて用ひよがよきよ。

○小兒泄泻とく股癰創瘍とよんともひよ東海
砂仁茯苓湯と角べり。生薑根、青竹肉桂、猪苓
澤液、白朮苓、苟藥、白朮、君硝、升麻、紫荊
葛草、君硝、右剤とくと生姜東風と加へて早
更へと効能有べり。

○小兒脾胃虛弱ふくて脇下りゆゑと脇の痛を止
く。生薑根、白朮、君硝、白朮苓、白朮散と同くよ。
人參、白朮、白朮苓、山茱萸、白扁豆、蓬萊、桔梗
砂仁、薏苡仁、君硝、甘草中す。右剤とくと生姜東

と加へて早更へ。後のりりほづくハ薏苡仁と生薑
と白朮のりみわくへ砂仁がゆくと月へ一粒挿す
と宣のより湯と用ひよ。

○小兒熱病時氣母性みとて猛びとせきく風邪
とくよを撃かげり。生薑、厚嗽、白朮、君硝、白
芍、生薑、白朮に危治乾姜と加へて用ひよ。よきや
くんがく。

○生薑みと後よゆんのあいすゞく脾留はううみ
らじ肝の俞、とりて、砂仁と生薑と生薑と砂仁
ハ善氣よゆく。び、敷むる事よりるくと身柱けどよ
又その椎と大杼椎とをすらめ、さく突きうちなり
和様すらうひとつよ。男先と生薑と生薑と生薑

又太刀の柄のあの方と見らるゝあると、和後中持とよよよ
とおもひきをなはすとよやくよことまゆくとよくへ來まう幸
かされと玉歎えりほほすもあれこまゆらうハシを答
えみをさうこまゆるふよりえーるづとさうを
み癒の病ありかはて癒移わるやゆつて天掘りとくと
あく一すすむ

又中院腰の下の腰をうる者とくろだとくろだとく
のあとく

京都出での風儀よ腰よ腰よ腰よ腰よ腰
くわらうとく腰せぬ者あーとく腰よ腰
くわらう半身腰に腰に腰に腰に腰に腰に腰に腰に腰に腰
腰をくとく腰よ腰定と腰よ腰よ腰よ腰よ腰よ腰

主水の腰筋すり病ありやんよくと腰よ腰と
べきそりふんの支板へ鶴の轍をどけくとく
より二十枚までそやしふきそと腰真んじらばよ
くさう小の病業と腰と腰と腰と腰と腰と腰と
と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と
れ腰仰よお腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と
と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と
と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と
と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と腰と

卷之三

三

卷之三

